

 <h1>学校だより</h1> <p>11月号 令和7年10月31日発行</p>	<p>朝霞市立朝霞第一中学校 〒351-0013朝霞市膝折2-31 TEL: 048-461-0076 FAX: 048-467-4741 E-mail: lchuu@asaka-s.ed.jp</p>
<p>目指す学校像 希望を胸に未来へ前進する学校</p>	



大人の壁



校長 唐松 善人

中学生は、いわゆる思春期にあり、大人になる入り口にいるといえます。そして、その入り口で悩み、大人に対して疑問を持ち、葛藤する中で大人を乗り越えようとするものです。この思春期にある生徒の身近にいる大人こそが、保護者であり、教師です。世間では、反抗期といわれることもある生徒は、一番身近にいる保護者や教師にぶつかり、反発をし、そして乗り越えようとする場合があります。

このとき、保護者や教師などの大人は「壁」になることが求められます。思春期にある生徒がぶつかる大人の壁は、その後の彼らの成長にとってなくてはならないものだからです。ただし、その壁には、条件があります。

一つ目の条件は、壁の高さです。低すぎる壁では、生徒に簡単に乗り越えられてしまいます。保護者や教師などの大人の壁を簡単に乗り越えた中学生は不幸といえます。社会において、「していいこと」と「してはいけないこと」の区別がつかなくなってしまう、歯止めが利かなくなるからです。これとは逆に、雲のような高さでは、生徒は越えようとする意欲をなくしてしまいます。それでは成長はできません。高からず、低からず、生徒が越えようとしてもなかなか越えられないけれど、越えてみようと思わせる高さの壁である必要があります。

二つ目の条件は、壁の材質です。生徒の気持ちを受け止めないコンクリートや鉄の壁であってはなりません。血の通った温かい壁であることが必要です。生徒の声に耳を傾け、言い分は聞く。その思いも真剣に受け止める。しかし、ダメなものはダメと毅然と跳ね返すことで、間違えた方向に行かないように導かなければなりません。最初から生徒の話も聞かずに頭ごなしに指導する硬い壁では、生徒は二度と本音を話してくれなくなってしまいます。

以上の話は、以前、私が従事していた校長先生から教えていただいた内容です。その校長先生は、生徒一人一人と向き合いながら、適切な壁を設定して立派に成長させていました。壁として生徒と日々向き合うことは、決して楽なことではありませんが、いつの日にか大人という壁を乗り越えて、立派に成長してくれることは、教師として最上の喜びではないでしょうか。その校長先生の後ろ姿から、私はそのようなことを学びました。

